

組門徒会・組門徒会員にかけられた願い

教学研究所長 楠 信生

はじめに

今年そ もんとかいは、組門徒会の改選期にあたりました。組門徒会員に再選された方、あらたに選出された方、ともに門徒会員にかけられた役割と使命を確かめていただき、宗門しゅうもんの運営にご尽力いただきたく存じます。

1 真宗大谷派宗憲のもとに

すべての宗教法人には願いや目的があり、社会的責任があります。その願いにもとづいた健康的な宗門しゅうもんの運営のために、真宗大谷派には「真宗大谷派宗憲しゅうけん」があります。国で言うところの憲法に当たります。

その「宗憲」前文は、次の言葉で始まります。

宗祖親鸞聖人は、顕浄土真実教行証文類けんじょうどしんじつぎょうぎょうしゅうもんるい せんじゆつを撰述して、真実の教たる佛説無量寿経により、阿弥陀如来の本願名号みょうごう ぎょうしん がんしやうを行信する願生浄土の道が、人類平等まっとうの救いを全うする普遍の大道であることを開顕された。かいけん

親鸞聖人は『顕浄土真実教行証文類』をお書きになり、真実きやうの教である『佛説無量寿経』むりやうじゆきやう だいむりやうじゆきやう（=『大無量寿経』）によって、本願を信じ念仏申す願生浄土がんしやうじやうど（浄土を願って生きる。）の道が、人類平等な と ふへん だいどうの救いを成し遂げる普遍の大道（人間によって考えられた道ではなく、如来が示された仏道であるから「普遍の大道」と言う）であることを、ひらきあらわしてくださいました。

真宗門徒の歴史は、親鸞聖人を宗祖しゅうそと仰いで聴聞あおしてきた念仏者ちやうもんの歴史です。そして宗門は、本願寺ほんびやうを真宗本廟として真宗門徒によって伝承護持されてきたのです。この伝統に立って、宗門運営のもっとも大切なところを「宗憲」で次のように確認さ

れています。

第一に、すべて宗門に属する者は、常に自信じしんきょうにんしん 教人信まこと つの誠どうぼうを尽くし、同朋社けんげん会の顕現に努める。

第二に、宗祖聖人の真影しんねいを安置する真宗本廟は、宗門に属するすべての人のきえしよ 帰依処であるから、宗門人しゅうもんじんはひとしく宗門と一体としてこれを崇敬そうきょうごじ護持する。

第三に、この宗門の運営は、何人の専横専断をも許さず、あまねく同朋の公議公論に基づいて行う。

第一の自信教人信は、「自ら信じ人を教えて信ぜしむ」と読みますが、自信教人信の歩みに終わりはありません。その意味で、「自信教人信の誠を尽くす」とは、終わりなき聞法と伝達に自身の生涯を尽くすということでありましょう。そして、あらゆる人々を同朋として見出す関係性が、実現するように努めることが挙げられます。

第二に、真宗本廟は、親鸞聖人の御真影（説法しておられるお姿）を安置している場です。この場が帰依処と言われる理由は、三宝（仏宝・法宝・僧宝）に帰依をする仏教徒の基本にしたがって、きえさんが 帰依僧伽、つまり教団に帰依するという意味を表わすものです。教えは一人ひとりによって聞きとられるものであることは言うまでもありません。しかし、教えを正しく受けとめる（聞く）ためには、とも 朋（法友・同じ念仏する人）が欠かせません。蓮如上人に次のような言葉があります。

「四五人の衆しゅう、寄り合い談合だんごうせよ。必ず、五人は五人ながら、意巧いぎょうにきく物ものなり。能く能く談合よすべき」

れんによしょうにんごいちだいききまがき
（『蓮如上 人御一代記聞書』真宗聖典 877 頁）

寄り合い談合とは、今の言葉で言うならば座談会のことです。五人がいたら五人がそれぞれ思いのままに聞くので、正しく聞くには相談をして自分の受けとめ方を確かめなさいと言われるのです。そして念仏の教えを聞く根本道場こんぼんどうじょうとすべき場が、無数

の念仏者が足を運ばれた真宗本廟であるのです。

第三に、宗門の運営は、同朋の公議公論に基づいて行うことが確認されています。宗門の運営は、かつて御門徒に公開されたものではありませんでした。しかし、寺院・教会が御門徒によって支えられているのと同様、宗門も御門徒に支えられてあるものです。そこで宗憲では、一部の人の考えによって教団の方針が思いがけないことにならないように、開かれた議論を待って進められることを確かめるものとなっています。

第一の、宗門に所属する人が、自主的に聞法し、聞法の輪を広げ、ともに尊敬しあえる間柄あいだがらを実現すること。第二の、宗祖親鸞聖人に出会う場として真宗本廟を大切に思うこと。第三の、同朋の公平な議論にもとづいて宗門運営がなされること。このような確認を基礎に「宗憲」が成立しました。その具体化の一つとして、門徒の宗政参加を願って参議会が発足されたのです。

この参議会の基盤となるのが組門徒会そもんとかいです。全国のすべての組に組門徒会が整備されましたが、組門徒会の代表者によってさらに各教区の門徒会が構成されています。

2 真宗門徒ということ ～親鸞聖人との出遇い～

真宗門徒とは、親鸞聖人があきらかにされた浄土真宗の教えの門に入り信仰を同じくする人々、という意味です。たとえば「家は代々門徒です」と言われることがあります。この場合、「私自身は浄土真宗の教えのことはよくわからないけれども、自分の家は昔から〇〇寺の檀家だから門徒なんだ」という方がおられます。また、「私の親はよく寺へお参りした人で、私も親が亡くなってから寺とかかわるようになって、今では法座には欠かさず参らせてもらっています」という方もおられます。そして、「私はたまたま親鸞聖人の教えに出遇うことができ、念仏の教えを生涯聞き続けたいと思い〇〇寺に所属しています」という方もおられます。それぞれのご縁です。た

だ、真宗門徒であるということは、それこそ、かけがえのないご縁の中におられるということは確かなことなのです。

それというのも、老人でも若者でも、善人と思われている人も悪人であると思ひ悩む人も、みなひとしく仏の智慧の^{まなこ}眼をいただいて、人生の方向が浄土へと向かわせていただけるのが、親鸞聖人があきらかしてくださった真宗の教えなのです。

親鸞聖人御自身、ほんとうに救われる道を求めて比叡山で修業をされました。しかし、比叡山で20年の時を懸命に生きられても納得ができませんでした。聖人は、悩みに悩んで「ただ念仏すべし」と説かれる法然上人のもとを訪ねられたのです。親鸞聖人御自身が、このようにして念仏の教えに出遇われました。その後、聖人は越後、関東で、田舎の人々、つまり大地に生きる人々と出会いつつ、大著『教行信証』を著わされたのです。この『教行信証』にあらわされた普遍の仏道こそ、念仏の教えであります。親鸞聖人を宗祖と申し上げるのは、「私」に真実の宗を明らかにしてくださった方である、ということにもとづくものです。このような出遇いをされた人を真宗門徒というのです。このことはとても難しい、むしろめずらしいことで、自分には遠い話に聞こえると思われるかもしれません。しかし家は先祖代々^{うち}と言っているその先祖が、実は親鸞聖人の教えと深く出遇われた方であったのも事実であります。

3 寺は聞法の道場 ～聞法の「法」とは、南無阿弥陀仏～

かつて、オウム真理教の信者である若者がサリン事件の後で警察に「あなたの住んでいる町にもお寺はあるでしょう」と問われて「日本の寺は風景でしかなかった」という旨の発言があったと報道されたことがありました。このことは多くの寺院関係者にとって衝撃的なものでした。

もちろん、このような言葉がすべてに該当するとは言えません。しかし、今日の寺

の状況がある程度は言い当てたものであることは確かです。その意味では、寺は再生されなければなりません。ことに真宗寺院における再生とは、寺が聞法の道場として地域に生きることです。このことは僧侶だけとするものでも、できるものでもなく、ご門徒と共に力を合わせて歩むことによって実現されるものです。もちろん、人がたくさん集まればよいというものではありません。ただ、念仏の教えを正しく聞き伝えることが要です。聞法は、生活の真まことのよりどころを徹底してあきらかにすることをおして、この世のいのちが終わって帰る世界をもあきらかにするものです。

4 同朋会運動 ～念仏者の誕生と輪の広がりを願って～

真宗大谷派では戦後間もない1951（昭和26）年に「同朋生活運動」が始められました。これは念仏総長と呼ばれた暁あけがらすはや鳥敏師が、戦後の困窮と人心の荒廃の中、真宗門徒の生活を回復するために真宗本廟への清掃奉仕が全国に呼びかけられたものです。

それから5年後の1956（昭和31）年には、宮谷法含みやたにほうがん総長が就任され、「宗門しゅうもん白書はくしょ」を出されました。その中には「仏道を求める真剣さを失い、如来の教法きょうぼうを自他に明らかにする本務に、あまりにも怠慢たいまんである」という厳しい懺悔さんげの言葉が述べられています。今なお、身の引き締められる指摘です。

そして1962（昭和37）年、念仏者の誕生と輪の広がりを願って同朋会運動が発足したのです。運動が展開していく中で「家の宗教から個の自覚の宗教へ」というスローガンが掲げられました。このスローガンの願いは、先に述べたように「〇〇寺の檀家」という在り方から、一人ひとりが真宗門徒としての自覚をもっていたきたい、念仏の信念に生きる人となっていたきたいということにあります。決して個人主義を勧めたり、家の宗教を否定したりすることを考えたものではありませんでした。

現代は、孤独と不安が問題となっている時代です。その意味では、新たな家庭像が求められている時代ともいえるのではないのでしょうか。核家族化が進み、個室文化といわれる時代に、親子間での信仰の相続が難しくなっている中ではあります。しかし、個の自覚の宗教を背景とした家庭、念仏の声の聞こえる家が今、求められているのではないのでしょうか。

5 門徒会の役割と使命 ～念仏に生きる「人の誕生」と「場の創造」～

真宗大谷派は全国が25のきょうく教区に分かれていますが、それぞれの教区がまたそ組に分かれています。全国25教区の組の合計は394カ組となっており、各組に組門徒会が組織されているのです。

そもんとかい
組門徒会の目的は、条例（組制）で次のように定められています。

第17条 組門徒会は、寺院及び教会に所属する門徒の代表として、教化の振興をはかるため、組が行う施策について審議し、組の運営に寄与するとともに相互の連携を深め、どうしんどうぼう同信同朋の実を挙げることを目的とする。

各寺院・教会が念仏の教えを聞き伝える場であると同様、組門徒会の目的も「教化の振興をはかる」ところにあることは言うまでもありません。角度を変えて見るならば、組門徒会の存在は開かれた宗門運営の基盤であると同時に、その目的にある教化の振興ということも、一人でも多くの人が念仏の教えに出会い、集まることが喜びであるという場に寺院・教会がなるという願いであるのです。

さらに組門徒会の構成について、真宗大谷派では男女両性でつくる教団をめざしております。男女共同参画の具体化が開かれた宗門の必須の課題ではありますが、その動きは決して望ましい形になっているとは言えないのが実情です。これからの確かな歩みが願われています。

6 ともに「念仏者たらん」 ～次世代への懸け橋に～

現代は無宗教を標榜^{ひょうぼう}する人が増え続けております。かつての日本人は、無宗教を名のりつつも、葬儀は何のわだかまりもなく仏式で、というのが通例でした。今は、寺とのかかわりを深く持ちたくないという宗教離れ、寺離れの人が増えているのです。

ところが現代人は無宗教を意識しながら、不安と孤独に苛^{さいな}まれるという矛盾をかかえています。このことが意味するものは何でしょうか。

第一に挙げなければならない寺離れの要因は、先に紹介した宮谷法含総長が発表した「仏道を求める真剣さを失い、如来の教法を自他に明らかにする本務に、あまりにも怠慢である」という事実です。私どもは深く懺悔しなければなりません。

第二に、時代社会の要求に応えようとした新宗教は、オウム真理教の事件を契機にして、おそろしいものというレッテルを張られ、人々の宗教離れに拍車をかけました。もとより新宗教は時代の人の悩みに敏感にこたえるという性質のものであると同時に、人間の欲求に流されやすいという問題を持っているのでしょう。

第三には、伝統的な宗教も人々の悩みにこたえようとしつつも、心にしみる言葉を発信しきれなかったという課題もあります。

他にも問題はいろいろ考えられますが、不安と孤独という宗教心と深くかかわる問題を先人の智慧にふれることなく悩み続けるということは、あってはならない悲しむべきことです。

門徒会員という大切な役職におつきになられた方々には、現代に生きる人々、未来の人々に教えを伝える懸け橋となってお尽力くださることを切に念ずるものです。